

ある原稿の行方

中山 正 敏（東大教養）

1. 夏休のころ物性研の白鳥君とおしやべりをしている時に、技官の人達の物性研についての意見をまた聞きした。それはあらまし次のようなことであつた。

物性研が共同利用研究所であるという立前から、私達は所外の人との共同研究のためのサービスをしなくてはならない。それは覚悟はしていたものの、現実にかかなりの労働過重になつている。大体あれだけの規模の研究所でガラス工が一人、化学分析に三人……といった人数では絶対に人手不足だ。その上に共同研究があるのに、各研究室についてもそうだが、共通サービス施設への助手、教務員、技術者の配置や予算の配分に際してその分が考慮されていない。共同研究の負担がしわ寄せされてかかってくる。

それに研究者の方では、使う権利が当然ある、といった顔をして割りこんできて用を言いつけるがこれでは自分の研究は満足にできない。サービス部門に伝票を書けば、後はボタンを押せば用が足りるくらいに思っているのかも知れぬが、とんでもない話だ。

化学分析にしても、物性研で要求されるような高純度の多種多様な試料をこなすには、既存の技術では到底まに合わず、いろいろと新しい方法を工夫せねばならぬ。

技術者の待遇、格付けも大問題だ。研究サービスの必要上残業しても超勤手当も出ない。教育職でない人は行2にしか格付けされないし、研究所内での発言権も小さい。こういう状況だから、低温設備などでも技術習得に2～3年は必要だというのに、半年や一年くらいで民間に流出して居つ

かないというような問題も起つている。要するに技術者は使われるもの、研究者は一段上から利用するもの、といった一種の階級ができつつあるのは問題だ。

この話を聞いた時、正直のところショックを受けた。それは我々研究者が研究の合理化、能率化を考える際に忘れがちな一つの大事な問題を教えられたからである。その後ある技官の人がこのような意見をまとめて物理学会誌の談話室に投稿したということを聞いた。この問題は多くの研究者や技術者によつて討論されるべきものだと思います、大いに期待していた。

2. ところが九月になつてこの原稿が掲載されなくなつたということを聞いた。驚いて白鳥君や松平さん、小野周さんなど身近の編集委員をつかまえて事情を聞いたところ大変な事実が明かになつた。

原稿の掲載の可否はまず編集委員会で問題となり、結局物性研内外の数人の個人的意見を聞いて修正することを条件にて載せることになつた。

松浦編集委員長が投稿者と相談して上の手順をふんで修正を加え、決定稿を作つた。問題はこの後に起つた。編集委員長がたまたまこの原稿を物性研の近角教授に見せたところ一寸待つてくれと言われ、その後で武藤所長と会うことになつた。編集委員長は所長に編集委員会としての経緯を説明し物性研の人にも見せて掲載に賛同を得たと言つた所、所長はそれは誰だと聞き、とにかくゆつくり検討させてくれと原稿を預つてしまつた。その後近角所員から委員長に投稿を取り下げる旨電話があつた。委員長はそれでは困ると返却を所長に催促したところ、所内の事は所内で解決するといった返事で、そうこうしているうちに投稿者から取下げたいという書面が届いた。—— こういう話である。

3. まず物性研の取つた態度は誠に残念である。所長が原稿を預つてから取下げが行われる迄の経過は知る由もない。しかし、種々の意見を聞いて修

正までした原稿を取下げからには、よほどの事情があつたと推察される。

物性研に限らず一般にある研究組織の中の問題点についてそこに属する人が広く研究者一般に訴えることは、それが興味本位の内幕暴露やためにする中傷でない限り、大いに歓迎さるべきことである。なぜならそのことによつて研究機構上の重要な問題が具体的な形で提出され、人々によつて率直に討論が交され、有効な解決策が得られるものだからである。これは決して組織の恥を天下にさらす、といったことではない。恥だという感覚、またそこからできるだけ内輪の話で済まそうとするところに、問題が素直にとり上げられて正しく解決されることを妨げるものが芽生える危険がある。今度の投稿者がそうであるように、発言者の旨分が低く格付けされている場合はなおさらである。更に今回の場合、問題は共同利用、共同研究に関したことのだから、討論は所外の研究者技術者も当然参加してなさるべきである。その際所内、所外の人達が自由に活発に意見を交換することによつて十分有効な解決と相互理解が得られるはずである。物性研の全体の意見をまとめ、所外の人全体の意見をまとめ、2つを取組ませるといった事大的なやり方では本当に聞かれなければならぬ切実な意見はどこかに消えてしまうのではなかろうか。

それに第一、物性研の内か外かによつて意見が画然と別れるものでもなかろう。

4. 次に編集委員会の側にもいくつかの問題がある。決定稿ができてから後、所長に見せ原稿を手離したのは何といつても委員長の重大な失態である。

こういうことでは大げさに言えば、我々は安心して投稿をすることができない。今度のように所属機関の長に原稿を見せるようなことは今後はやらないことが編集委員会で確認されたそうだが、委員会はこの事件の反省を我々会員に対してはつきりとすべきである。

また、委員会が原稿修正にあたつて物性研所内の人の意見を聞いた事にも問題がある。所内の人となれば利害関係もかなりあるはずだ。そういう人に、反論など討論の原稿を頼むためならとにかく、掲載如何にも響くような形で原稿を見せ意見を求めるのはおかしいのではないか。早い話が、最初に近角教授に見せたとしたらどうなつたであろうか。

5. 投稿のいきさつについての話が長くなつてしまつた。はじめに立ち帰つてみよう。1で紹介した技官の人達の声は、物性研に限らず、大学や研究所での技術サービス部門に共通した問題を提起している。技術サービス部門に対する注文およびその強化の必要性は、研究者の側からはこれまでもたびたび述べられ将来計画の中にも入つてゐる。しかし現在の問題点の正確な把握には、技術者の側からの発言がどうしても必要である。その上で研究者と技術者が対等の立場で批判し討論し合うことによつて真に有効な新しい機構が産み出されるであろう。このことを抜きにしてはいかなる名案も結局は研究者の独善的なプランに終り、技術者からそつばを向れることになるのではなからうか。

「物性研究」評判記

編 集 子

物性研究第1巻第1号は、10月7日にでき上り、すぐ旧物性論研究の読者に送るとともに、13日からの九大での物性分科会の総合受付で「売り出し」た。このような雑誌が必要だと考えた編集者の考えが正しかつたかどうかは、発行が続けられるだけの読者が得られるかどうかによつて判定されるだろう。その最終判定が出るまではまだ若干時間がかかりそうなので、ここで、九大で学会講演の合い間に耳にしたこの雑誌の評判を書き